

---

## 昭和戦時期における海軍省課長級の動向の解明 —新史料・大石保兵備局第1課長の日記を用いて—

山口 昌也

### <要旨>

なぜ海軍省課長級（海軍省の課長職にあった佐官級の将校）は、東條英機内閣総理大臣兼陸軍大臣の参謀総長兼任にならった嶋田繁太郎海軍大臣の軍令部総長兼任につき、統帥権を犯すものと批判した一方、米軍に占領されたサイパン島奪回作戦の実施を主張し、統帥に関与しようとしたのか。先行研究は、課長級の嶋田更迭運動への意識的な関わりを前提に、課長級自身の統帥関与の事情を嶋田更迭のためと解釈してきたが、豊富な一次史料をもとに考察していない。

本稿は、近年防衛省防衛研究所で公開された大石保兵備局第1課長の日記を用いて大石の思考と行動を考察し、課長級の全員が嶋田更迭運動に意識的に関わっておらず、課長級はサイパン陥落の危機に臨み、海軍省へ十分に情報提供しない軍令部に対する憤りと、不十分な情報提供に伴って戦局の実相を把握できていなかったことから、省部一体化による作戦指導の必要を訴え、サイパン奪回を主張したと指摘していく。

### はじめに

昭和19（1944）年6月、米軍はサイパン島に上陸し飛行場を占領した。さらにマリアナ沖において、日本の機動部隊は敗退する。絶対国防圏の一角、サイパン島は陥落の危機に瀕していた。

海軍部内では、サイパン奪回作戦の実施是非をめぐる議論が巻き起こっている。軍令部は、奪回作戦の実施に消極的であった。一方海軍省からは、作戦実施の積極意見が出た。積極意見の主な主張者は、高木惣吉海軍省教育局長とその部下の神重徳教育局第1課長、そして神と海軍兵学校同期（48期）の大石保兵備局第1課長である<sup>1</sup>。当時、海上護衛総司令部参謀であった大井篤によれば、この積極意見の主張は、嶋田繁

---

1 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・聯合艦隊<6>—第三段作戦後期—』（朝雲新聞社、昭和46年）18-21頁。

太郎の海軍大臣更迭のための「演出」であったという<sup>2</sup>。これより先、嶋田海相は、同年2月における陸海軍間の航空資材配分において海軍の主張を貫徹できなかったこと、さらに同年同月に東條英機内閣総理大臣兼陸軍大臣が現職のまま参謀総長を兼任したことになって軍令部総長を兼任したことから、海軍部内の批判を受けていた。7月、サイパンが陥落する。嶋田は海相を更迭された。嶋田更迭の翌日、東條内閣は総辞職する。嶋田の海相更迭は、「内閣の急所」に迫るものであった<sup>3</sup>。

昭和戦前期の海軍省課長級などの動向は、先行研究において一次史料をもとに考察されてきた<sup>4</sup>。昭和戦時期（昭和16～20年）の海軍省課長級の動向についても、課長級が嶋田更迭までの海軍部内の政治過程において重要な位置にあることから、以下のように政治史に関する先行研究で論及されてきた。

マリアナ沖海戦の敗北後、サイパンが陥落の危機に瀕した折、高木と課長級はサイパン奪回を主張し、嶋田ら作戦当局者を公然と批判した<sup>5</sup>。高木は部下の神に、海軍省の課長会議で反嶋田の空気を醸成するように指示している。高木と課長級の不満の矛先は、現状維持に甘んずる嶋田ら海軍首脳部だけではなく、嶋田の海相更迭に反対する東條にも向けられた。高木と課長級は、東條が内閣総辞職を回避するため、陸軍に協調的な嶋田海相を必要としていると捉えたからである<sup>6</sup>。高木はさらに、嶋田の更迭運動を推進していた重臣の岡田啓介に、課長級の反嶋田の空気を伝え、課長級によるテロの可能性を示唆した。その後岡田は、東條に対して嶋田の海相更迭を要求する<sup>7</sup>。

しかし、嶋田更迭運動の目的は、結果として東條内閣の総辞職の事態がありえたとしても、倒閣を目的とするものではなく、あくまで海軍主体の決戦に勝利するためのものであった<sup>8</sup>。それが明確に倒閣運動に転換したのは、サイパン陥落直前の昭和19（1944）年6月末、岡田と高木に対し、東條と海軍首脳部が圧力をかけたことによるものだった<sup>9</sup>。

2 大井篤『海上護衛戦』（KADOKAWA、令和5年）276-279頁。

3 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部<8>——昭和十九年七月——』（朝雲新聞社、昭和49年）501頁。

4 森山優『日米開戦の政治過程』（吉川弘文館、平成10年）97-125頁。

5 高木と課長級がサイパン奪回を主張し、公然と批判したことについては、とりわけ戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・聯合艦隊<6>』92-101頁；鈴木多聞『「終戦」の政治史 1943 - 1945』（東京大学出版会、平成23年）57-107頁が詳しい。

6 高木と課長級の不満の矛先については、とりわけ鈴木『「終戦」の政治史 1943 - 1945』57-107頁；手嶋泰伸『昭和戦時期の海軍と政治』（吉川弘文館、平成25年）142-176頁を参照。

7 重臣の岡田に関する動向は、柴田紳一「重臣岡田啓介の対米終戦工作」『政治経済史学』500号（平成20年4月）303-315頁を参照。

8 運動の目的については、とりわけ畑野勇「第2章 日本海軍の戦争指導と社会学者・技術官僚の役割」小林道彦・黒沢文貴『日本政治史のなかの陸海軍——軍政優位体制の形成と崩壊 1868～1945——』（ミネルヴァ書房、平成24年）230-231頁を参照。

9 運動目的の転換時期については、手嶋『昭和戦時期の海軍と政治』142-176頁を参照。

以上の先行研究の成果は、課長級の嶋田更迭運動への意識的な関わりを示している。昭和19(1944)年7月当時、海軍省には海軍兵学校出身の課長級が11名いた(軍令部は8名)<sup>10</sup>。これら課長級が一致して反嶋田の構えであったとすれば、その動向はたしかに、嶋田更迭運動において無視できないものだったと推察される。

しかし先行研究の成果には、不明確な点がある。それは、なぜ課長級は東條の参謀総長兼任にならった嶋田の軍令部総長兼任につき、統帥権を犯すものと批判した一方で、自らの所掌から離れてサイパン奪回作戦の実施を主張し、統帥に関与しようとしたのか、という点である。先行研究は、あくまで課長級の嶋田更迭運動への意識的な関わりを前提に、嶋田の総長兼任に対する課長級の批判的な反応を重視し、課長級自身の統帥関与の事情については、嶋田更迭のためと解釈してきた<sup>11</sup>。しかし、この解釈は豊富な一次史料をもとに考察されてきたものではない。実際一次史料として、大石兵備局第1課長の意見書は現存するものの、大石の動向を断片的に伝えるのみである<sup>12</sup>。

近年、この大石の日記(以下、「大石日記」)が、防衛省防衛研究所において一般公開された。この日記は、大石が海軍兵学校の生徒であった大正期から、東條内閣総辞職後の昭和19(1944)年9月までの、大石の思考と行動に関する克明な記録である。本稿は先行研究の成果を踏まえながら、新史料である大石日記を用いて大石の思考と行動を考察し、課長級の統帥関与の事情について新たな知見を加えようと試みていく。

本稿の第一節では、第二節と第三節での大石の思考と行動を考察する準備として、思考と行動の主体である大石が、いかなる海軍将校であったかを明確にしたい。具体的には、「海戦のターニング・ポイント」<sup>13</sup>とされる昭和17(1942)年6月のミッドウェー海戦の敗北から、東條内閣への批判が高まっていた昭和18(1943)年末までの、悪化していく戦局に対する大石の心情的変遷について検討する。この検討を通じ、大石は戦局悪化を憂慮しつつも、高木のように事態の打開のため即座に自らの職務から離れた行動には出ず、自らの所掌に全力を尽くす一般的な海軍将校であったと明らかにしていく。

第二節は、昭和19(1944)年2月のトラック空襲以降における大石の思考と行動を考察する。大石は戦局打開のため、軍令部と連合艦隊司令部の陣容一新と省部一体の

10 秦郁彦『日本陸海軍総合事典 第2版』(東京大学出版会、平成30年)435-448頁。

11 鈴木『「終戦」の政治史 1943-1945』72頁。

12 防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵「官房軍務局保存記録施策関係綴 昭和十七年七月～二十年八月」(請求記号:⑤航空部隊、航空本部、73)。

13 戸部良一、寺本義也、鎌田伸一、杉之尾孝生、村井友秀、野中郁次郎『失敗の本質——日本軍の組織論的研究——』(中央公論新社、平成3年)70頁。

作戦指導体制への刷新を構想し、他の海軍省課長級と共有していく。

第三節は、サイパン陥落の危機を前にした大石の思考と行動を考察する。大石は直属の上司や他の課長級と連携し、海軍の全力発揮によるサイパン奪回の必要を訴えていく。

そして最後に、第一節から第三節の考察内容を総括し、新たな知見を提示したい。

なお、本稿の引用史料中、仮名遣いは原則原文のまま、〔 〕は筆者の補註である。特段断りのない限り、旧字は新字に改め、適宜読点を補った。踊り字はカタカナで表記した。また、表記不能の軍隊符号については、その部分に〔 〕をつくり、〔 〕の中に意味するところを記述した。

## 1. 昭和18年末までの大石の心情的変遷

昭和17(1942)年6月5日、南雲忠一第1航空艦隊司令長官率いる機動部隊は、ミッドウェー海戦において主力空母4隻と重巡洋艦1隻を喪失、熟練の搭乗員も多数失い、大敗を喫する<sup>14</sup>。大石保首席参謀は、草鹿龍之介参謀長に対し、「幕僚一同の意見としてこの際長官に善処を勧めてくれ。自分たち一同も潔く自決する」と迫った。草鹿は大石に翻意を求める<sup>15</sup>。大石は、結局自決を思いとどまったが、「心が散って仕事捗らず。言ふに足るべき程努力せず。何の顔あって戦死者の英霊に接せんや」と自身の日記に自責の念を綴った<sup>16</sup>。

しかし、大石は同月15日、海軍中央が海戦敗北を受けても極めて積極的であると知っておりありがたいとし、いかなる困難に遭っても禍を転じて福となし、敵軍をせん滅しなければならぬと奮起していた<sup>17</sup>。

大石は7月、第1航空艦隊首席参謀から海軍大学校教官に異動、翌8月1日、海軍省人事局より、特設巡洋艦「愛国丸」艦長就任の内報に接する。艦長就任の報に接した大石は、「武士の本懐」と日記に綴った。同月24日、「愛国丸」に着任する。「愛国丸」は大石の予想以上の優秀船であった。大石は自らの責任がいよいよ重大と感じ、軍務

14 日本側の戦死者総数は3,056名、その内搭乗員が121名、非搭乗員が2,935名。戦死した搭乗員で、在隊年数が判明している118名の内、84名が4年以上だった。澤地久枝『記録 ミッドウェー海戦』(筑摩書房、令和5年)580-581頁参照。

15 草鹿龍之介『連合艦隊——参謀長の回想——』(中央公論新社、令和3年)168-169頁。この草鹿の回想では、大石は「前任」参謀と記されているが、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ミッドウェー海戦』(朝雲新聞社、昭和58年)141頁を参照し、「首席」参謀とした。

16 防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵「大石保日記 昭和十七年」(請求記号：①中央、日誌回想、1034)6月22日条。

17 同上、6月15日条。

に集中していく<sup>18</sup>。

大石の「愛国丸」着任よりも前の8月7日、米軍はガダルカナル島に反攻を開始していた。連合艦隊司令部はトラック島に進出する。「愛国丸」艦長の大石は、ガダルカナルをめぐる作戦に直接参加しなかったが、シンガポールからラバウルに向けて兵員輸送に従事した<sup>19</sup>。

その後、インド洋において敵通商線の破壊作戦に参加する。この作戦における僚艦は「報国丸」であった。「報国丸」艦長の今里博は、大石と戦前からの付き合いであったという。11月、「報国丸」は敵商船を発見、敵のコルベットと戦闘状態に入った。この戦闘で「報国丸」が沈没、今里は退艦を拒否し船とともに沈む<sup>20</sup>。大石日記には、「誠に感慨無量、其の壮烈なる戦死を深く悼むと共に此の貴重なる戦訓を断して無にせざることを誓ひ、英霊の冥福を祈る」、とある<sup>21</sup>。

12月8日、開戦2年目を迎えた大石は日記に、「さあ二年目も勝ち抜くぞ」と決意を記している<sup>22</sup>。翌昭和18(1943)年3月、大石はトラックの連合艦隊司令部を訪問する。この日の大石日記には、「トラック入港〔中略〕直にGF司令部(武蔵)に行く。山本〔五十六〕長官、宇垣〔纏〕参謀長、久しき御心労に拘らず、御元気にして有難く又心強く感す、此の司令部は気分よし」、とみえる<sup>23</sup>。大石は親友の今里を喪っていたが、山本長官らと接し、士気をあげたと考えられる。

ところが4月18日、山本長官が戦死する。後任は古賀峯一であった。山本の戦死から約一か月後の5月22日、日本国内にいた大石は、新聞で山本長官の戦死を知る。大石は日記に、「新聞を見て始めて『連合艦隊司令長官山本五十六大将、去四月、前線にて作戦指導中敵機と交戦、機上に於て壮烈なる戦死を遂げられたる』旨、承知す。全く晴天の霹靂、申す言葉なし〔中略〕死力を尽し元帥〔山本〕の英霊に応へんのみ」、と綴った。翌日の日記には、「1430頃水交社着、1515頃山本元帥英霊を御迎へす。感極まる」、とある<sup>24</sup>。同月27日、ミッドウェー海戦で戦死した柳本柳作少将の論功が発表される。さらに30日、アッツ島の日本軍守備隊全滅が大本営から発表された。大石はそれぞれの日の日記に、「海軍論功発表、柳本柳作少将、旭二功二、感無量、只管、粉骨英霊に応へん」、「〔アッツ島守備隊山崎保代大佐以下〕全員玉砕、戦傷病者は敵

18 同上、7月20日、8月1日、8月24日条。

19 同上、9月19日-12月9日条。

20 同上、11月11日、11月12日条。

21 同上、11月12日条。

22 同上、12月8日条。

23 防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵「大石保日記 昭和十八年～十九年」(請求記号：①中央、日誌回想、1035)昭和18年3月9日条。

24 同上、昭和18年5月22日、5月23日条。

隊突入に先立ち自決。誠に壮烈無比、吾等死力を尽して英霊に応へざるべからず」と書き留めている<sup>25</sup>。

かくして大石は、山本長官の戦死に衝撃を受けて以来、「英霊の冥福」を祈るだけでなく、さらに踏み込んで、自らも身命を賭して「英霊」に応えなければならない、と日記に繰り返し書き記したのであった。

しかし、昭和18(1943)年末までの大石は、戦局打開のため自らの職務から離れた行動には出ず、あくまで自らの職分を全うしようとしていく。山本長官が戦死する前の4月9日、大石は、海軍省兵備局第3課長着任の予定と人事局から申し渡される<sup>26</sup>。兵備局第3課は、港務・運輸・通信に関する事項を管掌した<sup>27</sup>。大石日記には、「所謂華々しき配置にあらねど無限の重要性を有す」とある<sup>28</sup>。

山本長官の戦死後の6月、大石兵備局第3課長は、海軍運輸の主務者として、その機構改革に尽力する。従来の海軍運輸部は海軍運輸本部となり、地方運輸部は運輸部となった。運輸部の下には運輸支部が新設される。海軍運輸本部は新たに、海上護衛機関との連絡事務を管掌することになった<sup>29</sup>。大石は自らの日記に「機構大に強化せらる」と綴っている<sup>30</sup>。

10月、軍令部は独自に「海運総隊案」を起案した。これについて大石日記には、「昨日〔同月8日〕午後、軍令部起案の海運総隊案に就いて会議をせし由、主務課長たる自分に通知なく誠に不都合千万なるのみならぬ、内容にも実情に副はざる点多きを以て反対意見を回す。実情を知らずに機構いじりを事とするは誠に困ったものなり」、「午後軍令部案、海上交通総司令部編成に関する会議を行ふ、大局、実情共に知らざる机上論にして甚た不本意ながら、特殊の事情ある為、護衛関係のみの機関を設くるには同意す。不愉快なり」とある<sup>31</sup>。このように軍令部の案は、「爱国丸」艦長として輸送任務に従事していた大石にとって、「机上論」以外の何物でもなかった。軍令部の行為は、職分を全うしようとする大石から見て、自らの職域を犯す「不愉快」なものに映ったと考えられる。11月15日、海上護衛総司令部が発足する。

翌16日の大石日記には、「午後石油還送強化に関する会議行はる、実情誠に寒心に堪えざると共に主務課長として責任を痛感す。石に齧りついても解決せざるべからず」とみえる。さらに同月30日、大石の接した情報によれば、11月の輸送船の損害は2

25 同上、昭和18年5月27日、5月30日条。

26 同上、昭和18年4月9日条。

27 秦『日本陸海軍総合事典 第2版』519頁。

28 「大石保日記 昭和十八年～十九年」昭和18年4月9日条。

29 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 海上護衛戦』（朝雲新聞社、昭和46年）202頁。

30 「大石保日記 昭和十八年～十九年」昭和18年6月25日条。

31 同上、昭和18年10月9日、10月18日条。

万tに達し、開戦以来最高となった<sup>32</sup>。これより前の21日米軍は、ギルバート諸島のマキン島とタラワ島に上陸を開始。大石はこれについて、先月ソロモン諸島のモノ島の陥落に続き、「今回も敵を突き落とし得ざるものゝ如し」と日記に綴り、観測するに留まっている<sup>33</sup>。マキン島守備隊は24日、タラワ島守備隊は25日に全滅した。

一方の高木惣吉は、沈滞した海軍部内の雰囲気を知り、戦局打開のため各方面に働きかけ、海軍首脳の人事を動かそうとしていく。高木は、昭和18(1943)年9月に舞鶴鎮守府参謀長から軍令部出仕となって以来、「東京の空気が打ちつづく戦局の重圧で息苦しくなって来た話をいろいろ聞かされた」という<sup>34</sup>。同年11月、高木は海軍省を廻り、かつて部下であった扇一登調査課員から、「日本民族の能力の限界が見せ付けられたようで憂鬱です」と聞く。高木はさらに、保科善四郎兵備局長と矢牧章軍務局第2課長兼調査課長を訪ね、「いずれも戦局を憂える点で一致していたが、表面に出しては発言も行動もでき難いし、これという対案も見付からぬという真情のように見受けた」という<sup>35</sup>。同月、高木は木戸幸一内大臣を訪ね、海軍だけではなく東條英機内閣の陣容、そして「統帥部の再検討が焦眉の急である」と伝えた。高木はまた、12月高松宮宣仁親王に対し、「海軍首脳の人事を刷新して部内の空気を転換しなければ、軍政軍令ともに沈滞銷沈して遂に救い難くなる。現在既に手遅れの感が深いのに局部長何れも身を挺する者がいない」と海軍の窮状を訴え、昭和天皇と木戸に進言するように依頼している<sup>36</sup>。

以上のように、大石日記を見ると、山本長官の戦死に衝撃を受けて以来、単に戦死者を追悼するだけではなく、自らも身命を賭して応えなければならないといった表現が増えていくことがわかる。しかし、大石の戦死者に対する応え方とは、上司の保科や同じ課長級の矢牧と同様、あくまで自らの職分を全うすることであった。

この中にあって高木の行動は際立っている。高木は自らの人脈を生かし、海軍首脳の人事について意見していた。高木は、海軍将校の中で特異な存在だったといえる。一方の大石は、決して高木のように特異な海軍将校といえず、自らの所掌に全力を尽くす一般的な将校であった。しかしその大石も、さらなる戦局の悪化を受け、自らの所掌から離れた行動に移っていく。

32 同上、昭和18年11月16日、11月30日条。

33 同上、昭和18年10月27日、11月21日条。

34 高木惣吉『高木惣吉日記』（毎日新聞社、昭和60年）125頁。

35 同上、137-138頁。

36 同上、144、151頁。

## 2. トラック空襲以降の大石の思考と行動

昭和19(1944)年2月17日、米機動部隊がトラック島を空襲した。トラック島は、海軍の前進根拠地としての機能を喪失する。また、「愛国丸」など多くの艦船が沈没、航空兵力もほとんど全滅する<sup>37</sup>。大本営は愕然とした<sup>38</sup>。大石はこの日の日記に、「愈々戦争深刻となれり、国家は一人に依りて興り、一人に依りて亡ぶ〔中略〕勝利は最後迄勝利を確信する者の上に在り、不撓不屈なれ、全力を出さば必ず天祐あり」と書き記した<sup>39</sup>。

同月21日、東條首相兼陸相と嶋田繁太郎海軍大臣は現職のまま、それぞれ参謀総長と軍令部総長を兼任する。25日、矢牧は高木に対し、嶋田の総長兼任までの経緯を語り、その防止に奔走したものの、失敗に終わったと嘆いた。高木の日記には、「軍令部、海軍省の課長級は部内情勢に絶望しているとの話で、私〔高木〕の見聞した印象に符号する。但し部長、局長連は大勢順応で海相の独裁に余り強い反発を示していないという」とある<sup>40</sup>。嶋田に対する海軍部内の不満は、中山定義海軍省軍務局第2課員兼調査課員によれば、総長兼任の前から顕著となっていた。嶋田は同月10日、陸海軍間の航空資材の配分をめぐり、軍令部や航空本部の要求通りに海軍航空の強化を実現できなかったという<sup>41</sup>。重臣の岡田啓介はこの当時を回想して、海軍部内では、嶋田が東條のいいなりになるため「嶋田副官」というあだながつき、信望をなくしていたとしている<sup>42</sup>。

一方、大石兵備局第3課長の批判の矛先は、嶋田一人に絞られておらず、軍令部や連合艦隊司令部などの主要職員全体に向けられていた。東條と嶋田が総長を兼任した2月21日の大石日記には、「本日、陸海軍大臣夫々参謀総長、軍令部総長に兼補せらる、我国始まりて以来の事、以て事態愈々並み並みならぬことを明示す、此の事は理論的には賛成にして国家総力戦の立前より軍政軍令と無理に分ける要なし、問題は人に在り」とある<sup>43</sup>。矢牧のように踏み込んで嶋田に対する評価を下していない。3月9日の日記には「夜は1845より海上交通保護に関する御前研究の準備打合に列す」とあり、同月12日「午後、御前研究の第二回打合せあり。総長〔嶋田〕、〔海上〕護衛〔艦隊司令〕長官〔及川古志郎〕等主要職員多数参加の上、主義方針には殆ど触れず、作

37「大石保日記 昭和十八年～十九年」昭和19年2月17日条。

38 軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下』（錦正社、平成10年）548頁。

39「大石保日記 昭和十八年～十九年」昭和19年2月17日条。

40 高木『高木惣吉日記』175頁。

41 中山定義『一海軍士官の回想——開戦前夜から終戦まで——』（毎日新聞社、昭和56年）183頁。

42 岡田啓介『岡田啓介回顧録』（中央公論新社、平成27年）226-227頁。

43「大石保日記 昭和十八年～十九年」昭和19年2月21日条。

文の会議に終る。当事者の不勉強憤慨の至りなり」とみえる<sup>44</sup>。同月30日、米機動部隊は、パラオ島とヤップ島を空襲する。連合艦隊司令部は前日、空襲を予想して、旗艦「武蔵」からパラオ島に上陸していた。そして、「武蔵」など連合艦隊所属の艦船をパラオから退避させている。大石日記には、4月4日「PP〔パラオ〕に於ける油槽艦船の被害、予想以上に大なり、現地部隊の処置全く痛憤の極みなり」、同月12日「PP被空襲時、GF〔連合艦隊〕の行動、其の後の状況を聞く、誠に誠に残念至極なり。銘肝せよ」、とある<sup>45</sup>。

パラオ空襲の翌31日、古賀連合艦隊司令長官は、パラオからフィリピンのダバオ基地に向け飛行中に遭難する。3月に教育局長に就任していた高木は、古賀の遭難を岡田に伝えた。岡田は、「それは大変だ。年寄りもこうしてはおれん。一体どうすれば善いと思うか」と高木に畳みかけた。高木はこの真剣な岡田の態度から、嶋田更迭の実現を岡田に期待する<sup>46</sup>。

しかし、嶋田更迭はなかなか実現しない。高木は、「中堅層を動かすほかに方法はない」と決意し、部下の神重徳第1課長に「情勢を打ちあげ、戦備促進の名目で本省の課長懇談会を活発化して大にネジを巻いて貰いたい」と指示した。4月21日、神は高木に、「課長会議の空気は大体われわれの気持ちに同調し、東條、嶋田のコンビでは我慢できぬ、というのに一致している。兵備局各課長〔大石〕は物動の面から純真に憂慮してるし、一課長（山本善雄大佐）も軍備の面から強硬」、などと報告する<sup>47</sup>。

大石は、この課長会議から程なくの日記に、「最困難なる課題は最良の指導者なり」と書き記した<sup>48</sup>。たしかに、「東條、嶋田のコンビでは我慢できぬ」という同じ課長級の空気は、大石にこのような問題意識を持たせる契機となった可能性がある。しかし大石のいう「指導者」が、東條と嶋田を指しているとは限らない。実際、この課長会議以降も大石の批判の矛先は、あくまで軍令部と連合艦隊司令部の主要職員全体に向けられていく。

米機動部隊は、4月30日から翌5月1日にかけて再びトラックを空襲。最初の空襲後に補充されたトラックの航空戦隊は、再度、壊滅的な打撃を受ける。大石日記には、「昨日及本日、トラック、敵大機動部隊の空襲に曝らされあり、誠に切齒の極みなり。陸海、省部真に渾然一体となり、根拠ある必勝方策を樹立せざるべからず」、とある。さらに船舶被害の激増について日記に、「今旬、船舶被害激増、益々緊張を要す」、とみ

44 同上、3月9日、3月12日条。

45 同上、昭和19年4月4日、4月12日条。

46 高木『高木惣吉日記』197、201頁。

47 同上、201 - 203頁。

48 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年4月24日条。

える<sup>49</sup>。5月13日から兵備局第1課長を兼任していた大石は、「戦局愈々深刻、最後の段階に近づきつゝあり。何を措きても、敵撃滅に邁進せざるべからず」、とした。同月27日には、連合軍が西部ニューギニアのビアク島に上陸したと知る。大石は29日の日記に、「ビヤクの我軍奮戦の様相なるも敵は如何程にても増援可能なるを以て前途断じ難し、如何にしても必勝方策を練り出さざるべからず」、と記した<sup>50</sup>。

翌30日、大石は、山本善雄軍務局第1課長に対し、「貴官ノミ御一覽ノ上保管サレ度、適当ノ機ニ貫ヒニ行ク」と脇書きした「時局処理に関する意見」<sup>51</sup>を提出した<sup>52</sup>。この意見の冒頭部分には、「誰ニ聞カズトモ『此ノ俣デハ駄目』ナコト丈ケハ確カナリ。此ノ点ニ関シ陸軍ヲ始メ部外ニ対シ言フベキコトモ少ナカラズト雖、先ヅ部内ニ於テ尽スベキヲ尽スコト何ヨリモ肝要ナルヲ以テ甚ダ抽象的ナガラ、此ノ際是非断行スベキ点ヲ記ス」、とある。

「此ノ際是非断行スベキ点」とは要するに、海軍の全ての力を発揮するため<sup>53</sup>、攻撃精神を失った現在の軍令部と連合艦隊司令部を再発足させた上で、海軍省と軍令部が一致して作戦指導に当たる、省部一体の作戦指導体制に刷新するべきというものである<sup>54</sup>。この背景には、大石の連合艦隊と軍令部に対する不信感があった。たとえば、大石の同意見の中には、「殊ニ先般 PP〔パラオ〕ニ於ケル GF〔連合艦隊〕ノ行動ガ統帥上如何バカリ悪影響ヲ与エタルカ、勿論聞カズ語ラザルモ真ニ憂慮ニ堪エズ」、「之〔玉碎〕ガ如何バカリ、統帥上将又国民ノ士氣ニ悪影響ヲ与ヘツ、アルヤハ言フ迄モナシ〔中略〕何人モ『已ヲ得ズ』ト納得スル丈ケノ手ヲ尽シアルヤニ関シテハ大ニ疑アリ」、「現在〔海軍省と軍令部は〕考ヘバラバラニシテ、互ヒニ相信セズ、歩調乱レアルハ否ミ難シ〔中略〕先ツ必要ナル職員ニハ事ノ真相ヲ知ラシメ、又今後ノ方策ニ付テハ之以外ノ方法ナシト云フ迄充分理解セシメ、以テ全員歩調ヲ揃エ渾然一体トナリ何等疑惑ナク唯一路邁進セシムル施策ヲ絶対必要トス」、などとある<sup>55</sup>。

また、攻撃精神を強調する大石は、劣勢であればこそ、ますます攻勢に出なければ到底勝ち目がないと考えていた。同じく意見には、「假令一機ニテモ奇襲ヲ行ヘバ偉功ヲ奏スルコトアルベシ。守勢ノ墮勢ツケバ止マル所ヲ知ラズ」、「敵大型機（四発以上）ニ対スル体当り敢行〔は〕統帥上至難ノコトナレド、国家ノ危急ヲ救フ為、差当り他ニ方策考エ得ザルヲ以テ、大統帥ノ見地ヨリ難キヲ克服シテ断行スルヲ要ス。之ニ依

49 同上、昭和19年5月1日、5月6日条。

50 同上、昭和19年5月13日、5月19日、5月27日、5月28日、5月29日条。

51 同上、昭和19年5月30日、5月31日条。

52 「官房軍務局保存記録施策関係綴 昭和十七年七月～二十年八月」0426-0431（史料端に記された番号）。

53 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月1日条。

54 「官房軍務局保存記録施策関係綴 昭和十七年七月～二十年八月」0426-0431。

55 同上。

り敵四発一〇〇機撃墜セバ戦局ノ様想一変スベシ」、などとある<sup>56</sup>。

このように大石は山本軍務局第1課長に対してのみとはいえ、「統帥」に関わる意見を述べたのであった。山本は、大石の意見に「同感」と書き記している<sup>57</sup>。

6月3日、大石兵備局第1課長兼第3課長と浜田祐生同第2課長、神教育局第1課長兼第2課長兼第3課長、川井巖人事局第1課長、長屋茂同第2課長の5名は会同した。大石日記には、「此の戦局乗り切りに関し深刻なる研究を行ふ」、とある<sup>58</sup>。浜田と川井は、山本軍務局第1課長と同期の47期。長屋は、大石・神と同じ48期であった。同月7日の日記には、「夜、有志課長懇談会、水交社、意見大体決す」、とみえる<sup>59</sup>。大石は、あえて「有志」と日記に書いたことから、定例の課長懇談会ではなく、自らと志を同じくする課長たちと会談したものと考えられる。ゆえに「有志課長懇談会」には、少なくとも6月3日に戦局打開のため深刻なる研究を実施した、大石・浜田・神・川井・長屋の5名は、出席していたと推察される。この懇談会で大体一致した意見は大石日記においても詳細不明だが、ここまでの事実関係を踏まえれば、前述の大石の山本軍務局第1課長に対する意見内容（＝軍令部などの陣容一新と省部一体の作戦指導体制への刷新）を、たたき台にしたものだった可能性がある。

以上のように、大石は、海軍の一大根拠地であったトラックへの2度目の空襲以降、戦局の悪化をますます憂慮していく。そしてついに自らの所掌から離れ、同じ課長級の山本に対し、慎重を期しつつも「統帥」に関わる意見を出したのであった。この大石の意見には、完全に東條内閣の打倒は念頭にない。そして、海軍主体の決戦に勝利するための嶋田更迭も考えられていない。大石が最も問題にしたのは、海軍部内で尽くすべきことを尽くしていないことであった。尽くすべきこととは、攻撃精神の欠如した軍令部や連合艦隊司令部の陣容一新と、省部一体の作戦指導体制への刷新である。

大石は、自らの「統帥」に関わる意見について山本軍務局第1課長の了解を得、同志の課長級と連携する行動にも出たと考えられる。たしかに「有志課長懇談会」における議題は、大石日記においても明確に記されていない。しかし、山本からの了解を得てから程なく開催されていることから、大石の意見内容をたたき台とした可能性がある。

56 同上。

57 同上。

58 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月3日条。

59 同上、昭和19年6月7日条；秦『日本陸海軍総合事典 第2版』436-440頁。

### 3. サイパン陥落の危機を前にした大石の思考と行動

米機動部隊は6月11日から連日、マリアナ諸島に空襲を繰り返した。同月15日、米軍はサイパン島に上陸を開始、18日には飛行場を占領する。これを受けて大本営は、サイパン奪回作戦の検討を開始した。19日、日本の機動部隊は、マリアナ沖において米機動部隊と衝突。大本営は、このマリアナ沖海戦において「セメテ相打程度ナランコト」を祈っていた。しかし20日、詳細不明なるも、日本の機動部隊が退避した模様、大本営の空気は暗澹とする<sup>60</sup>。

大石は、6月11日から連日のマリアナ空襲に関する情報をつかみ、同月14日の大石日記には、「マリアナ方面昨夜終日敵の砲撃を受け、今や完全に其の制圧下に在り、更にテナンには敵上陸の報あり、愈々最後の段階に入る、此の俛にては到底、此の戦局を乗り切り得ず」とあり、大石の焦燥感がうかがえる。さらに翌15日の日記には、サイパンへの米軍上陸と連合艦隊司令長官の「あ」号作戦発動に関する情報を得、「真に皇国の興廃此の一戦に在り、只管努力奮励あるのみ」とある<sup>61</sup>。

大石は20日の日記に、「大切なる決戦に於て予期の戦果挙らず、誠に恐懼に堪えざるも、断して挫折すべからず、今が大事の時なり」とあり<sup>62</sup>、大石がある程度の情報を入手していたことをうかがえさせる。そして同日、直属の上司である保科兵備局長に意見書を提出、次のようにサイパン奪回の必要を訴えた<sup>63</sup>。

万一、PS〔サイパン〕を失ふことあらば、作戦上の深刻重大なる不利は申すに及ばず、陸軍及国民の海軍に対する信頼は地を掃ひ、海陸提携は今後永遠に望み得ざるべし、従って海軍は航空並に潜水部隊は固より全兵力を集中し一切を此の一挙に賭け石に齧りついても目的を貫徹せざるべからず、本作戦を続ける限り敵も艦隊の大部を釘着けとするの余儀なかるべきを以て我としては敵撃滅の好機たと共に海陸軍を渾然一体となす天与の機会なり、而も此の間敵は他の方面に対し大規模作戦を行うふの算少きを以て正に一石三鳥と謂ふべし

この「一切を此の一挙に賭け石に齧りついても」とは、前述の山本軍務局第1課長に対する5月30日の意見書を踏まえれば、奇襲はもとより、敵航空機に対する味方

60 軍事史学会『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下』547頁。

61 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月11日、6月12日、6月13日、6月14日、6月15日条。

62 同上、昭和19年6月20日条。

63 「官房軍務局保存記録施設関係綴 昭和十七年七月～二十年八月」0340-0341。

航空機による体当たり攻撃も含め、あらゆる手段を講じることを指していると考えられる。大石は、残存する全兵力で手段を問わず、サイパン奪回に賭けるべきと意見したのであった。

保科は大石の意見に同意し、この意見を岡敬純軍務局長に伝え、岡から同意を得ている<sup>64</sup>。

大石は翌21日、山本軍務局第1課長に対し次のように要請した<sup>65</sup>。

- 一、別紙意見〔上記引用〕は兵備局長〔保科〕より軍務局長〔岡〕にも話され、軍務局長よりも全然同感の意を表せられたりと。此の際軍令部を極力支援して力づけると共に全海軍の士気振作上必要なる措置を至急執るの要ありと認む、
- 二、現段階に於て機密保持固より必要なるも、関係深き〔海軍省の〕課長には真相を知らしめ相共に憂へ、且発奮して総力以て敵に当らしむる如く軍務〔局〕に於て指導あらんことを望む、現在の作戦は軍令部のみにて出来る程生優しきものに非ず、省部気合を合はせる事何よりも肝要にして此の点機密保持と関連聡明なる判断を要す

山本はすでに5月の段階で、大石の省部一体の作戦指導体制への刷新に賛同していたのであり、さらに、大石から要請を受ける前、澤本頼雄海軍次官を訪ね、「軍令部が血迷ったか何も見せぬ。修理するにしても予め準備せざるべからず。こちらにては大に建直しを計画しあるに係はらず、無知にて出来ず。軍令部に対し抗議せり」と伝えており<sup>66</sup>、大石からの要請に対し「全然同感ナリ、其ノ積リニテ実行中ナリ」と返答した<sup>67</sup>。

このような中、嶋田海相兼軍令部総長は、昭和天皇のサイパン奪回に対する強い意思を受け、軍令部第1部に、奪回作戦の具体案作成を指示している。そして嶋田は、大石が山本に省部一体の必要を訴えていた21日、軍令部内の検討会において、軍令部と海軍省が一致して、サイパン奪回作戦の準備に当たるべきと発言していた<sup>68</sup>。

翌22日、保科兵備局長は岡軍務局長と伊藤整一軍令部第2次長を訪ね、「マリアナ決戦を挑み、サイパンを奪回すべきとの意見書」を提出、省部首脳会議の開催を要請

64 同上、0339。

65 同上。

66 伊藤隆、沢本倫生、野村実「史料紹介 沢本頼雄海軍次官日記——東条内閣崩壊の序曲——」『軍事史学』第25巻第2号（平成元年9月）60頁。

67 「官房軍務局保存記録施策関係綴 昭和十七年七月～二十年八月」0339。

68 戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・聯合艦隊<6>』21-27頁。

する<sup>69</sup>。

同日、海相官邸において首脳会議が開催された。首脳会議の席上嶋田は、サイパン奪回作戦の実施の意思を表明する。澤本次官と岡軍務局長からも、同様の意見が出された。保科は、中澤佑軍令部第1部長に対し、「万難を排し万策を尽して速かにやっ  
て欲しい。米側も困っていると思う。死中に活を求めよ。今を措いて他に好機なし」と発言。保科はさらに、「塚原〔二四三〕軍令部第一次長は、奪回の望みが少ない。飛行機が少いからだ。又飛行機をやっても後は続かないと言われるが、われに自信がないと陸軍はついて来ない。陸軍の飛行機の助力がないと望みなしと言われるが、それでは何か名案ありや——なしと言うことだ。結局それでは今倒れるか、後で倒れるかのことだけではないか。今起てば国民を奮起させようべきも、退けば海軍は死の道を辿るばかりでなく、国民精神も永久に振起せしめえざるべし」と強調した<sup>70</sup>。

会議の結論は、「サイパンを堅持しなければならないことには異存がないが、作戦当事者には自信がない。そのためには陸軍を同意させえないということであった」という<sup>71</sup>。

かくして大石は、上司の保科や同じ課長級の山本と緊密に連携し、省部一体の作戦指導の必要を改めて訴え、サイパン奪回に向けた行動に乗り出していた。大石は、サイパン陥落の危機に際し、サイパン奪回作戦を決戦と位置づけ、差しあたり現在の省部の陣容で一致して海軍の全力をあげようとしたと考えられる。この大石の念頭に、嶋田更迭の考えはない。

一方高木は、このような大石ら課長級の動向を充分把握できていなかった。省部首脳会議が開催されていた22日、高木は神を呼び、「サイパン奪回作戦の促進に乗りだす決意を告げ、軍令部方面の主に作戦関係筋には一課長〔神〕から働きかけ、課長会議の空気も動かして欲しいと望んだ」<sup>72</sup>。神は、「そうですとも！サイパンを取られて大和、武蔵を残し何の役立つもんですか！」と、高木よりも「気負い立ち今日から早速やります」と返答する<sup>73</sup>。このように高木は、課長級の大石や山本がすでに動いていたにもかかわらず、神に課長会議の空気を動かしてほしいと指示している。また、この前日すでに神は、中澤軍令部第1部長を訪ね、「私〔神〕を山城艦長にして欲しい。私は山城を指揮し、サイパン島に進出、海上より陸戦を援けて米軍を撃破したい」と

69 保科善四郎、大井篤、末國正雄『太平洋戦争秘史——海軍は何故開戦に同意したか——』（財団法人日本国防協会、昭和62年）88頁。

70 同上、90頁。

71 同上、91頁。

72 高木『高木惣吉日記』242頁。

73 同上、242頁。

申し出ていた<sup>74</sup>。高木は、大石や山本だけではなく、直属の部下である神の動向も、把握できていなかったと考えられる。

高木は、神に指示した同22日、重臣の鈴木貫太郎や米内光政、岡田を歴訪し、サイパン奪回の必要を説き、「部内でこの促進運動をやるから大將がたも応援して頂きたいと懇願した」という。高木はまた、翌23日保科と矢牧を訪ね、「サイパン戦に対する意向を聞き、奪回作戦の緊急性を語る。海軍省各部の空気を総合すれば、サイパン奪回に対しては軍令部自体が余り熱意なく、陸軍の尻込みが更に軍令部、特に作戦課の消極的態度を助長してる」ことを知る。さらに、「海軍省側ではサイパン奪回戦に反対するとか、乗気でないという部局は殆んど見当らず、大体マリアナが今次大戦の山として、海軍も最後の決意を堅めるべき時機である、と見る者が多い」ことも認識した<sup>75</sup>。

23日夜、課長会議が開催される。同日の大石日記には、「海軍省主要課長、戦備促進に関する懇談あり、PS〔サイパン〕を確保すべし、之が為〔飛行機〕、水上艦艇、〔潜水艦〕の全力を集中するを要すとの意見に一致す」、とある<sup>76</sup>。主要課長級はサイパン奪回のため、飛行機や水上艦艇、潜水艦の全力を集中すべきことで一致したのであった。これは、大石の保科に対する20日の意見書と同じ内容である。大石のサイパン奪回意見は、主要課長級の総意となったのであった。

高木は、神から課長会議の報告を聞こうと待っていた。しかし神は、高木が退庁するまでに帰らなかった。翌24日、高木は、「神大佐を呼んで昨日の様子を聞くと、一課長〔山本親雄軍令部第1課長〕の説得工作は大体順調のようである。山本一課長、中澤一部長〔軍令部第1部長〕共に神の奪回作戦の論理に根本的な反対はないようである。問題は飛行機の展開が難しいこと、燃料補給の困難それに陸軍の協力が望み薄という三点に帰着するらしい」、と理解した<sup>77</sup>。

このように高木は、保科と矢牧から海軍省全体の空気を聴き取っている。また、神から軍令部方面の説得工作の結果についても聴取していた。しかし、高木は結局のところ、大石がサイパン奪回意見で意図したことや、この意見が主要課長級の総意となったことまで聴取できていない。

大石の意見が主要課長級の総意となった23日、大本営陸軍部戦争指導班は、海軍のサイパン奪回作戦について、最良の策ではないものの、現状に対処するやむを得な

74 中澤佑刊行会編『海軍中将中澤佑——作戦部長・人事局長の回想——』（原書房、昭和54年）142-143頁。

75 高木『高木惣吉日記』242-243頁。

76 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月23日条。

77 高木『高木惣吉日記』243-244頁。

い方途とした。そして、陸軍も中部太平洋防衛の本質的な性格を把握し、十全の支援を惜しんではならないとする<sup>78</sup>。しかし東條参謀総長は、マリアナ沖海戦の敗北を踏まえ、サイパン奪回作戦の実施に懸念を示していた。連合艦隊司令部においてもまた、作戦実施に消極的であった。このような空気は、23日、軍令部に伝えられる<sup>79</sup>。同日嶋田は、澤本次官・岡軍務局長・保科兵備局長・山本軍務局第1課長・矢牧同第2課長の5名を集め、「新方針〔サイパン放棄〕の止むなき」を伝えた。澤本の日記には、「〔嶋田は〕実行が出来ぬものを強いるわけには行かずと述べ、黙涙を呑む」、とある<sup>80</sup>。

翌24日、再び省部首脳会議が開かれる。嶋田は、連合艦隊に陸軍をサイパンに送り込む自信がなく、陸軍もまたサイパン確保の自信がないため奪回作戦を実施せず、より日本本土に近い線で防備を固めたいと発言。澤本次官と岡軍務局長は、嶋田の発言に同意した。

これに対し保科兵備局長は、「陸軍はサイパン奪取の自信がないとのことであるが、一体他に国土護持の方策を持っているものがあるのか。私の所見をもってすれば、万策を尽してマリアナを確保することこそ、最終勝利への最善の道であって、時日を経過するほどわれに不利となり、兵站の面からするも彼におよばず、遂には艦隊はのたれ死するに至るであろう。直ちに奪回戦に出るを最善とする。そうすればわが国民精神も損われずに生きる道があるであろう」、と反論する。

山本軍務局第1課長は、「結局海軍の総力を挙げてサイパンの確保をなすのに勝るよい方法はない。しかし陸軍と考え方が一致しないならば勝利は覚束ない。是非一致せしめられたい」、と主張した<sup>81</sup>。

大石は24日の日記に、「大臣〔嶋田〕より局長〔保科〕への説明に依れば、作戦部の方針消極の方に決定したる模様なり。然れども断して此の方針に従ふべからず、凡ゆる努力を尽して積極策に転ぜしむるを要す」、と記している<sup>82</sup>。

一方、同24日、高木は、神による東條暗殺計画を察知し、たとえいかなる理由であっても、「陸軍の巨頭を海軍の一部で狙うというのは二・二六〔事件〕の裏返しに近く絶対に避くべき」と考えた。同日高木は岡田を訪ね、嶋田が依然として海相だけではなく軍令部総長を兼任し、「オベッカ使いやお茶坊主に取りまかれながら、敗戦行進曲を続けておる現状は到底座視することは出来ないと思います。既に戦局を憂う課長級

78 軍事史学会『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下』548頁。

79 戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・聯合艦隊<6>』28-31頁。

80 伊藤ほか『史料紹介 沢本頼雄海軍次官日記』63頁。

81 保科ほか『太平洋戦争秘史』93-95頁。

82 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月24日条。

は動いていますし、第一線の空気は更に険悪」であると伝える<sup>83</sup>。

高木はさらに、「私どもがいかに関下方の御苦心を取次ぎましても、事実が具体的に現われなければ彼等を押えることは不可能と思います。海軍の伝統も国家の興廢には代えられぬし、また敗け戦をしても、部内統制だけ保っておれば善いということもないと思います。これからは或は閣下方の非常に遺憾に御考えになる事態が続発すると想像しますが、それは御赦しを願いたいのであります」として、このまま嶋田更迭が実現しなければ、テロが起こる可能性を示唆した<sup>84</sup>。

高木によれば、二・二六事件で命を狙われた経験のある岡田は、「それは飛んでもないことだ」と高木を凝視するが、「その額には汗ばみ頗る緊張して」いた。岡田は高木に「重ねて自重を説かれ」、重臣の鈴木や高松宮、木戸を歴訪し、「大勢は遅まきながら前進し始めた」という<sup>85</sup>。

後年高木は、この日の岡田との会談について、「重臣たちの動きに対する不満の表明という生温いものでなく、その前後海軍省課長級の不満は極度に悪化しており、また高木の周辺では東條暗殺の具体案まで研究され、東條、嶋田が政権に執着をつづけるときは、七月中旬を期してテロ決行の雰囲気があったので、岡田大将には、心で詫びながら真意を披瀝した次第であった」、と回想している<sup>86</sup>。

かくして高木は神と大石の動向を把握できていなかったことから、課長級のサイパン奪回に向けた行動を、嶋田に対する不満の爆発の表れと誤解した可能性が高い。もちろん、高木が岡田との会談の前に課長級の動向を把握した上で、あえて岡田にそれを明確に伝えなかった可能性も否定できない。しかし、いずれにしても高木は、岡田の嶋田更迭運動を促進するため、部下である神の東條暗殺計画を、大石も含めた「戦局を憂うる課長級」の総意であると岡田に示唆し、圧力をかけたのである。

同24日、大本営はサイパン放棄に決した。大本営陸軍部戦争指導班は、来月上旬中にはサイパン守備隊が全滅すると観測し、その日誌に、「最早希望アル戦争指導ハ遂行シ得ス、残ルハ一億玉碎ニ依ル敵ノ戦意放棄ヲ俟ツアルノミ」、と書き綴っている<sup>87</sup>。

同日、東條と嶋田の両総長は、サイパン奪回作戦の実施断念を上奏する。しかし、昭和天皇はこれを保留し、元帥会議に諮問するように命じた。翌25日、元帥らは天皇臨席の下、作戦実施の是非を議論するものの、最終的にその断念を奉答する。天皇

83 高木『高木惣吉日記』244-245頁。

84 同上、245頁。

85 同上、245-246頁。

86 高木惣吉『高木海軍少将覚え書』（毎日新聞社、昭和54年）64-65頁。

87 軍事史学会『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下』550頁。

はこれを裁可した<sup>88</sup>。大石日記には、「本日〔25日〕、御前会議に於て作戦方針御決定遊ばさる、何も申すことなし、本当に死力を尽し御国を護り奉らむのみ」、27日「我は何を為すべきや、根本方針は決せられしも当面目標未決、緊急策未だ起動に乗らず」、29日「根本明かならざる為、省内事務空転しつゝあり、統帥部何を為しつゝありや、戦局に対し神大佐奮闘、感謝に堪えず、マリアナの空を想ひ胸痛む」とある<sup>89</sup>。このように大石は、軍令部に対する苛立ちを隠せていないが、いまだ諦めずに行動している神に対し「感謝」するにとどめ、ともに行動しなかったとうかがえる。

7月7日、サイパン守備隊が全滅。大石はこの日の日記に、「今朝サイパン部隊最後の総攻撃。何とも言葉なし、南雲〔中部太平洋艦隊司令〕長官始め、陸海将兵の冥福を祈り、報復を誓ふ」と記す。そして、母親と妻子を東京から自らの故郷である高知に、疎開させることに決めた<sup>90</sup>。

7月17日、嶋田は海相から更迭され、軍令部総長専任となる。翌18日、東條内閣は総辞職。サイパン守備隊が同月16日ごろまでに「全員壮烈なる戦死を遂げし旨」が発表される。大石は18日の日記に、「本日程多事なるはなし。世に不可能はなし、我一人に力、皇国を護り奉らん」と記し、決意を新たにしたのであった<sup>91</sup>。

以上のように、大石はマリアナ沖海戦の敗北を知り、上司の保科や同じ課長級の山本に対し、省部一体の作戦指導体制の下、海軍の残存兵力を、あらゆる手段を尽して投入し、サイパンを奪回しなければならないと意見する。大石の意見は主要課長級の総意となり、省部首脳会議で保科と山本によって主張された。大石は、高木ではなく、保科や山本ら課長級と連携し、サイパン奪回を意見している。大石のサイパン奪回意見の意図は、サイパン奪回作戦という決戦において、海軍の全力を遺憾なく発揮することにあった。

このような大石ら課長級のサイパン奪回をめぐる言動は、海軍省の課長級が戦局の実相を十分に把握できるほどには、軍令部から海軍省への情報提供がなされていなかったことを物語っている。もちろん、先に大石日記で確認したように、大石はマリアナ沖海戦の敗北状況についてある程度知っていた。しかし、海軍省の中枢にいる山本軍務局第1課長が澤本次官に、「軍令部が血迷ったか何も見せぬ」、海軍省として戦局の建直しに貢献したいものの「無知にて出来ず」、と不平を鳴らしたように、結局のところ課長級は戦局の実相について、軍令部の作戦当局者に比べ「無知」なのであった。

88 中澤佑刊行会『海軍中将中澤佑』143頁。

89 「大石保日記 昭和十八年～昭和十九年」昭和19年6月25日、6月27日、6月29日条。

90 同上、昭和19年7月7日条。

91 同上、昭和19年7月18日条。

山本ら課長級が大石の省部一体の作戦指導の構想に共鳴したのも、軍令部からの不十分な情報提供に憤っていたためと考えられる。

高木は保科や矢牧から海軍省全体の空気を聴取したが、神と大石の動向を把握していなかったことから、課長級のサイパン奪回に向けた行動を、嶋田に対する不満の爆発の表れと誤解した可能性が高い。もちろん、高木が岡田との会談の前までに課長級の行動の実態を把握した上で、あえてそれを岡田に明確に伝えなかった可能性も否定できない。しかし、いずれにしても高木は、岡田に課長級の反嶋田の空気を伝えた上で、岡田の嶋田更迭運動を促進するため、岡田に対し、神によるテロ計画を課長級の総意であると示唆し、圧力をかけていたのであった。

## おわりに

なぜ海軍省課長級は、東條の参謀総長兼任になった嶋田の軍令部総長兼任につき、統帥を犯すものと批判した一方、自らの所掌から離れてサイパン奪回作戦の実施について意見し、統帥に関与しようとしたのか。これに対し先行研究は、課長級の嶋田更迭運動への意識的な関わりを前提に、嶋田の総長兼任に対する課長級の批判的な反応を重視し、課長級自身の統帥関与の事情については、嶋田更迭のためと解釈してきた。しかし、この解釈は豊富な一次史料をもとに考察されてきたものではない。実際一次史料として、大石兵備局第1課長の意見書は現存するものの、大石の動向を断片的に伝えるのみであった。本稿は先行研究の成果を踏まえながら、近年新たに公開された大石日記から大石の思考と行動を考察し、課長級の統帥関与の事情について新たな知見を加えようと試みた。

ミッドウェー海戦の敗北後、第1航空艦隊の首席参謀であった大石は、海戦敗北後、自決を考える程に責任を痛感する。自決を思いとどまった後も、自責の念に駆られている。しかし、海軍省や軍令部の高い士気に触れ、禍を転じて福と為すと奮起した。「愛国丸」艦長となった後には、開戦2年目も勝ち抜くと決意するとともに、山本長官以下、連合艦隊司令部の前向きな空気に触れた際、士気をあげている。

山本長官の戦死は大石の心を動揺させた。これまで大石は、親友の今里を含め、戦死者の冥福を祈るにとどまっていたが、山本の戦死を知って以降、さらに踏み込んで、自らの身命を賭して戦死者に答えなければならぬと繰り返し誓うようになる。

昭和18年末までの大石の戦死者に対する応え方とは、あくまで自らの職分を全う

することであった。「海運総隊案」を起案した軍令部に対してみせた大石の不快感は、大石が自他の職域を明確に意識していた表れと考えられる。このような大石にとって、他者の職域に踏み込むことは、容易ではなかったといえる。高木のように、自らの人脈を生かし、立場を越えて海軍首脳の人事について意見することは、大石を含めた多くの海軍将校の中でも、特異な行動であった。

たしかに大石は2度目のトラック空襲以降、海軍省兵備局の一課長であるにもかかわらず、統帥に関わる意見を述べていく。しかし元来大石は、自らに与えられた所掌に全力を尽くす、一般的な海軍将校であった。統帥に関与しようとした大石の行動は、やむにやまれず起こしたものと理解しなければならない。

戦局が最後の段階に入ったと感じた大石は、山本軍務局第1課長に対し、慎重を期しつつも意見を述べた。具体的には、来るべき決戦において海軍の全力を発揮するため、攻撃精神を失った現在の軍令部と連合艦隊司令部の陣容を一新させた上で、省部一体の作戦指導体制に刷新すべきと訴えたものである。この大石の意見に、東條内閣の打倒や海軍主体の決戦に勝利するための嶋田更迭は、含まれていない。有志の課長らは、この大石の統帥に関わる意見に賛同した可能性が高い。

それから程なく、サイパンは陥落の危機に瀕する。日本の機動部隊は、マリアナ沖での海戦に敗北。これを知った大石は、上司の保科兵備局長に対し、海軍の全力を挙げたサイパン奪回の必要を意見した。すなわち、海軍は航空ならびに潜水部隊はもとより、全兵力を集中し、一切をこの一挙に賭け、石にかじりついてもサイパンを奪回しなければならない。万一サイパンを失うことになれば、作戦上の重大な不利に陥ることはいうまでもなく、海軍に対する陸軍および国民の信頼は完全に喪失し、陸海軍の提携は今後実現しないであろう、と。

保科はこの大石の意見に同意しただけではなく、岡軍務局長と伊藤軍令部第2次長を訪ね、サイパンを奪回すべきと訴え、その検討のため、省部首脳会議の開催を要請する。

大石は山本軍務局第1課長に対し、サイパン奪回の必要について保科が岡から同意を得たと伝え、改めて省部一体の作戦指導の必要を訴え、軍務局の協力を要請した。大石のサイパン奪回意見は主要課長級の総意となり、首脳会議で保科と山本によって主張される。

このような大石ら課長級のサイパン奪回に向けた言動は、十分に戦局の実相を把握した上でのものではなかったといえる。たしかに、大石はマリアナ沖海戦の敗北状況がある程度つかんでいた。しかし、山本が澤本次官に軍令部の海軍省への不十分な情

報提供について不平を鳴らしたように、海軍省の中枢にいる課長級でさえ、戦局の実相について軍令部の作戦当局者に比べ「無知」なのであった。

首脳会議は、サイパン奪回作戦の実施断念を結論する。大石はこの結論には従おうとせず、あくまで奪回すべきとした。しかし、元帥会議において天皇臨席の下、断念と決定し、諦める。

一方の高木は、課長級の動向を十分に把握できていない。たしかに高木は、保科や矢牧から海軍省全体の空気を聴いている。高木はまた、神から軍令部方面への説得工作の成果も聴取していた。しかし高木は、大石のサイパン奪回意見の意図と、この意見が主要課長級の総意となっていたことを聴取できていない。

このような中で高木は、神の東條暗殺計画を察知し、絶対に避けるべきと考えていた。即日高木は岡田の嶋田更迭運動を促すため、岡田に対し、課長級の反嶋田の深刻な空気を伝えた上で、テロ計画の存在を課長級の総意であると示唆し、圧力をかける。二・二六事件で命を狙われた経験のある岡田は、高木の言葉に驚き、腰を据えて嶋田更迭運動に取り組むのであった。

以上のように、課長級の一人であった大石は、サイパン奪回に向けた海軍省内の連携に中心的な役割を果たしていた。大石の意図するところは、嶋田更迭ではなく、サイパン奪回作戦に海軍の全力をもって賭することである。課長級のサイパン奪回に向けて一致した一連の行動はたしかに、高木を通じ、岡田の嶋田更迭運動を結果的に後押しした。しかしそれは、少なくとも大石の意図とは離れている。課長級の全員が嶋田更迭運動に意識的に関わっていたわけではないのである。

先行研究では、課長級の嶋田更迭運動への意識的な関わりを前提に、嶋田の総長兼任に対する課長級の批判的な反応を重視し、サイパン奪回をめぐる課長級自身が統帥に関与しようとした事情について、嶋田更迭のためと解釈してきた。これに対し本稿は、大石ら主要課長級はサイパン陥落という危急存亡の秋に臨み、海軍省へ十分に情報提供しない軍令部に対する憤りと、不十分な情報提供に伴って戦局の実相を把握できていなかったことから、省部一体化による作戦指導の必要、つまり海軍省が統帥に関与することを積極的に支持し、サイパン奪回を強硬に主張したと指摘できよう。

(防衛研究所)

